

白い結婚を求め、離縁を求められる妻ですが、
既に家にはおりません。 2



ロビン

正体不明の仮面の騎士。想い人に愛を捧げるべく、剣技大会に参加する。

ユリアン

ランス王国の王太子。隣国の王女の不貞により、婚約を解消されてしまった。

リシャル

グランドラ辺境伯家の騎士団に所属する騎士。普段は温厚だが、実戦では鬼のように無双するほどの実力者。

エレクトラ

ヴェント子爵令嬢。グランドラ辺境伯領の教会に所属する治療士。元夫ハリードとの離縁が成立し、リシャルと婚約を結んだ。

登場人物
紹介



サラティエラ

ランス王国の王妃。

カタリナ

リュースヴェル公爵夫人。
気後れせず、面白いもの好きで活発。

ハリード

カールソン子爵家当主。
リヴィアの夫となるが、
ファーマソン公爵夫人
によって財政圧迫中。

リヴィア

カールソン子爵夫人。
ハリードの妻であり、
ファーマソン公爵の娘。



目次



一章 カタリナ・リュースウェル公爵夫人
006

二章 教会での出会い
043

三章 聖エレンシア剣技大会
073

断章 リシャールとハリードの対決
163

四章 様々な決着
172

五章 王妃サラティエラとの謁見
231

六章 ファーマソン公爵夫妻との対談
265

七章 幸せな結婚の提案
305

私とリシャル様は馬車に乗って移動している。窓の外に見えてきたのはランス王国の王都。

「流石は王都です。榮えていますね、リシャル様」

「ええ、本当に。エレンさんと来られて良かったです」

グランドラ領の街も榮えていたけど、やっぱり王都は別格らしい。煌びやかで活気がある。

私は隣に座るリシャル様の手に自身の手を重ねた。私の指には指輪が嵌められている。

水色の宝石、アクアマリンが付いた指輪。リシャル様から贈られた婚約指輪だ。

リシャル様に寄り添い、私は幸せを感じる。好意を抱き合う異性に触れるときめきもある。

ああ、私は……。元夫のハリード様とはこんな風に過ごしたこともなかったのね。

結局、私と元夫が夫婦らしくあれたのは結婚に向けて準備を進めている時ぐら이었다。

リシャル様とはあんな風な関係にはなりたくないと思う。だから、これからの私は幸せになるために頑張ろう。胸に抱いた温かな気持ちと共にそう誓う。

私、エレクトラ・ヴェントとその婚約者、リシャル・クラウディウス様は王都に来た。

その目的は、リユースウェル公爵家の公爵夫人、カタリナ様に会うこと。

私たちがお世話になっているグランドラ辺境伯の伝手もあり、面会の機会を得られたのだ。

「どのような方なのでしょうね、カタリナ・リユースウェル公爵夫人」

優しい方だといのだけけれど。

今回の王都訪問は、私が『戦場の女神』^{ミューズ}なんていう、大げさで照れてしまうような二つ名を受け入れて活動してきた成果だ。

小規模の部隊と共に行動し、能力を活かしてグランドラ領近隣の治安維持に勤しんでいた。

私たちの活動について耳に入ったのか、辺境伯閣下を通してリユースウェル公爵夫人と交流する約束を取り付けられた。

因縁があり、かつて私たちの人生を脅かしたファーマソン公爵家が、これからも私たちの人生の障害になるかもしれない。

そんなファーマソン公爵家と対立しても潰されない、同格のリユースウェル公爵家。

私たちは身を守るためにもリユースウェル家の後ろ盾が欲しかった。

加えて『英雄』と呼ばれた元夫のハリード様や『聖女』のリヴィア様に恩があるグランドラ辺境伯閣下は私たちの報復には手を貸せないだろう。そういう意味でも辺境伯閣下以外の、頼れる後ろ盾が欲しいところなのだ。

とはいえ、私も別にそこまで強く報復を願っているワケではない。だって今、私はリシャール様の隣に居るのだ。はっきり言って『ハリード様とは別れて良かったあ』状態である。

ただ『このまま終わり』にしているのか？ という、きつとそうではないと思う。

私が手を下さずとも元夫とその浮気相手はファーマソン公爵夫人の鉄槌^{てつづい}を受けている。

じゃあ、その制裁で納得したのか。彼らが勝手に不幸になったから？ それで一件落着なのか。

一つの物語は終わり、一応の決着がつき、私にはこれから幸せを掴める希望がある。

それなのに一体何が引つ掛かっているのか。

それは……ハリード様と私が結局のところ『話し合っていない』ということだろう。

かつての彼とは、はっきり言って話にもならないと思った。一方的で、ふざけた要求をされるだけだろう、と。だから、そんな彼とは話し合いたくなくて勝手に私は逃げた。

でも、離縁したのだ。互いに納得して結婚したのを解消する。

そこに話し合いが不要だなんてことは、本当はありえないと思う。慰謝料の要求なんて今更しないけれど、私が前向きに生きていくためにどうしても踏むべき手順がある。

だから、そのためにもファーマソン公爵家の干渉を受けない立場にならないといけない。

ハリード様たちに一方的な要求などされない存在になりたい。そう思っている。

私は、きつと『決着』をつけたいのだ。私自身の手で、納得のいく形で。

見くびられることなく、正面からきちんとした話し合いでの決着を望んでいる。

かつての私は逃げる以外になかったけれど、いつかそうでない自分になって面と向かって文句を言つてやりたい。その時は、うんと幸せな自分でありたいと望んでいる。

なんてつて別に彼らは家族の仇かたきだとか、そんな存在でも何でもない。だから復讐のために生きる人生である必要などない。私は幸せになりつつも……彼らを見返せる私でありたい。

リユースウェル公爵夫人に会うのは、そのための第一歩なのである。

「緊張してきましたね……。リシャル様はどうでしょうか」

「俺も同じですよ、エレンさん」

私たちはリユースウエル家が所有する王都の邸宅へと向かっていた。

公爵夫人のカタリナ様の評判やどういった人物かは辺境伯閣下から聞いている。

良い評判だ。だから大丈夫と自分に言い聞かせるものの、それでも緊張してしまうもの。

やがて、私たちを乗せた馬車は邸宅の門前に到着した。いよいよね。

門番に身分を名乗り、辺境伯閣下からの手紙と、今日のための招待状を見せた。

しばらくしてから許可が下り、門が開かれて馬車は敷地の中へと入っていく。

公爵家の邸宅らしく敷地は広い。馬車は遠目に見える屋敷には直接向かわず、道を逸れて進んでいった。そうして、とうとう馬車が停まり、目的地に辿り着く。

「エレンさん、手を」

リシャル様のエスコートで馬車から降りる。案内に従い歩いていき、四阿あやまが見えてきた。

そこには遠目からでも分かる貴婦人が居た。

複数人の護衛騎士や使用人を従えている若い女性。あちらも私たちの来訪を伝えられた様子だ。

貴婦人が立ち上がり、従者たちを引き連れながら、こちらへ近付いてくる。

私たちは頭を下げて彼女に礼を尽くした。

「顔を上げてください、お二人とも。ようこそいらっしゃいましたね。私がリユースウエル公爵の妻、カタリナ・リユースウエルです」

許可を得てから頭を上げて目の前に立つ女性を見る。

白銀のウェーブがかかった長い髪。アメジストのような薄紫色の瞳。

高貴さと美しさを兼ね備えた女性だった。

「お初にお目にかかります、リユースウエル公爵夫人。私はエレクトラ・ヴェントと申します」

「リシャール・クラウデウスです」

私たちは名乗ってから、改めて頭を下げる。

「グランドラ辺境伯から手紙を受け取ったわ。まずはこちらに来て、お掛けになって、二人とも」

「ありがとうございます」

公爵夫人の言葉に従い、四阿にある大きめの白いテーブルを挟んで夫人と向かい合い、私たちは座った。

「辺境伯からは、そちらのクラウデウス卿の『上級騎士爵』への推薦が欲しいと聞いているわ。合っているかしら？」

「はい、公爵夫人。その通りです」

「ええ、では、改めて、いくつか確認をさせてもらうわね」

公爵夫人は、リシャール様の経歴について確認を始める。もちろん、彼は嘘偽りなく答えていた。公爵夫人は、リシャール様の経歴について確認を始める。もちろん、彼は嘘偽りなく答えていた。『上級騎士爵』というのは文字通り、騎士爵の上位にある身分だ。

通常の騎士爵が男爵相当か、その少し下の準男爵相当となるのに対して、上級騎士爵は『伯爵』相当の身分となる。これはかなり高位の身分だ。当然ながら簡単になることは出来ない。

騎士としての実力を示すだけでなく、侯爵以上の高位貴族からの推薦が必要となる。

その上で王家の承認も必要だ。実力、人柄、人脈、それらがすべて必要となってくる。推薦した側はそのままその上級騎士の後見人の立場になる。

だから、少なくとも侯爵以上の貴族にきちんと認められなければならない。

後見人の利益になる人物ということ、だいたい高位貴族が抱えている騎士団の『長』を推薦するのが一般的だ。

推薦する侯爵以上の者が一人でも認められる場合はあるけれど、二家門以上の推薦があつた方が、より確実になる。

侯爵と同等の身分であるグランドラ辺境伯閣下には既に推薦をいただいているので、リュースウエル公爵家からも欲しい。

そういうお願いをする立場だつた。リシャル様ならば實力は申し分ないと私は思っている。

「クラウディウス卿がファーマソン公爵家の騎士団を辞めた理由は？」

「当時、右腕に大きな怪我を負い、引退せざるを得ませんでした」

「今はもう治っているようだけれど？」

「良い治療士に巡り合えたことで治していただけました。今は十全に動かすことができます」

細かいところまで確認される。ここまでは先に渡している情報通りだろう。

「辺境伯閣下のおっしゃる通りなのは分かつたわ。ここから確認すべきなのはクラウディウス卿の實力だと思ふけれど、その前に」

私たちは真剣に公爵夫人の言葉に耳を傾ける。

「どうしてリュースウエル家に推薦を頼もうと思ったのかしら？ クラウディウス卿は侯爵位以上の家には二つ、縁があるはずだわ。グランドラ辺境伯を除いてね。一つはロマーリア侯爵家。こちは、貴方自身あなたが所属していた場所ではないけれどね」

「確かにロマーリア家は私の父が居た騎士団ですが、私自身には縁がありませんでした」

リシャル様のお父様も騎士で、ロマーリア侯爵家はそのお父様が仕えていた家だった。

「そうね。まあ、ロマーリア侯に頼むのは筋違いというのは分かります。でも、ファーマソン公爵家は？ 怪我のせいで退団したのなら怪我が治った今、復帰も出来るはずだけれど」

「……自分は、こちらのエレクトラ様と婚約しております。彼女が居る場所に居たい、と思つています。そして……」

「ええ」

事情は説明している。嘘は書いていない。ただ問題となる部分を文章には残さないようにした。だから、つまりファーマソン家の騎士団であったゴタゴタについては良くも悪くも伝えていないのだ。ただ『怪我をしたから』引退したのだと。

当然、公爵夫人を騙す気はないので、ここでリシャル様の事情をお話しさせていただく。

リシャル様の口から、かつてファーマソン公爵家の騎士団で起きた出来事を、出来る限り客観的にお伝えすることになったの。

「ファーマソン家、騎士団長の思惑は分かりません。ただその件で怪我を負いました。自分も折り合い悪く……あの家に復帰出来るとは思えない、と。そう考えております」

「ファーマソン家の騎士団長だと、グレッグ・ゴドウィン卿かしら？」

「はい、自分が居た時はそうでした」

ファーマソン家の騎士団長、グレッグ・ゴドウィン。

リシャル様の右腕に大きな怪我をさせた男だ。私としては許せない相手ね。

ただ、そのゴドウィン卿は上級騎士爵で子爵家の妻を持つ人物。公爵家の騎士団長でもある。

権力的な面では今の私たちはどうにも太刀打ち出来ない相手だ。

「こうしてリユースウェル家を頼るといふことは貴方の個人的な『復讐』をしたためかしら？
リユースウェル家とファーマソン家は同じ派閥ではないものね」

「いえ、復讐や報復を積極的に望んでおりません。もちろん、思うところがあるのは事実です。
ですが今は愛する女性と縁が結ばれていますので」

ちよつ……。いえ、正直にお話しする場面ですけれど……！

私は突然の告白に恥ずかしくなるけど、真面目な話をしている場面なので何とか沈黙を貫く。

「つまり？」

「俺はエレンさんと幸せに生きられればいい。ですが、自分たちの人生を歩んでいくにはどうしても障害となる者たちが現れる。そのように考えております」

「ふうん。それは、エレクトラさんも同じ、ということ？」

「はい、公爵夫人。私もリシャル様と同じ考えです。私たちが望む人生を歩もうとする時、確かな立場を得ていないと彼らは障害となるだろう、と。そのように考えています」

公爵夫人は私たちの言葉に頷きつつ、話題を変える。

「ところで知っているかしら？ 王都であった『聖女の結婚式』の噂」

「……はい。辺境伯閣下からある程度のこととは」

「ふふ、私は参列していなかったのだけだね。とても楽しい結婚式と披露宴だったそうよ」
楽しい扱いか。関係ない人たちからすると、いい余興になったのでしようねえ……。

「そこで貴方の名前も挙がっていたのよ。渦中の人なのに、まったく関係ないなんて。とても面白

い立場ね、エレクトラさん」

「……私からは何とすることも出来ないことで」

「そうでしょうねえ、ふふ」

やっぱり把握されているのね。というより、リヴィア様たちの結婚式がきつと王都の社交界ではかなり広まっているのだと思う。そのついでに私の名前もそちら方面で広まっている？

「貴方たち二人は色々縁があつてファーマソン公爵家とはあまり相容れないのね」

「……はい。その、こちらから何かしたいワケではないのです。もちろん、リシャル様の腕の件では怒っていますけど」

「でも、貴方たちの『幸せ』や『出世』には邪魔が入るかもしれないのね？」

「そのように思えてなりません。何の証拠もありませんので誰かを責めることもないのですが」

「そうね。それはきつと正しいわ。誰も、何も、『今は』貴方たちにはしていないから」

そう。だから、すべて気にしないようにすればいいのか？ そうは思えないのが問題ね。

「でも、時間の問題でしょうね。辺境伯領での噂は徐々にこちらにも届くようになってきているから」
「噂ですか」

「『聖騎士』と『戦場の女神』様ね。ふふ、今日は貴方たちに会えて光栄だわ」

うっ。自分から利用しようと考えたとはいえ、やっぱり面と向かつて呼ばれると恥ずかしい。

「私の考えを言わせてもらおうとね。ファーマソン公爵夫人の『報復』は終わっていると思うわ。あとは『経過観察』だけだと思う」

「経過観察ですか」

「ええ。たとえば、エレクトラさんが離縁した元夫を援助しようとしたら、その時は彼女も動くかもしれない」

「援助なんて。離縁した身ですから、カールソン家のことには関わられません」

「そうでしょうね。でも、カールソンの領民のことは気にしている？」

「……それは、はい」

領民が苦しくなってきた時は実家である隣の領地、ヴェント子爵領に逃げて欲しいと思う。

でも、生まれ育った場所を簡単に捨てることは出来ないだろう。あとは彼らの良識に懸けるしかないのだけど。ただ、殊更に私の立場でカールソン家の領民を気に掛けることは出来ない。

そういったことを主張することも。それは権利や資格がないから、というだけではない。

私の『弱み』になりかねないからだ。『カールソンの領民を助けてやる代わりに』といった交渉が成立すると思われるのは不利益過ぎる。

仕方ないのだ。結局、私はあの領地を離れる選択をした。気になるけれど手は出せない。

「貴方たちの事情は概ね把握しました。次の話に移りましょうか」

私たちは改めて姿勢を正す。

「リユースウェル家とグランドラ家の協定で、あちらが望むというのなら『上級騎士爵』の推薦をすることは構いません。クラウディウス卿は実力、人格ともに申し分ないようですからね」

それは嬉しい言葉だ。思わず私の頬も緩みかける。

「でも、クラウディウス卿が上級騎士爵を得ることに、半分はリユースウェル家が責任を持つことになるわ。そのためには、やっぱり私たちにも何か『得』がないと。そう思わない？ クラウディ

ウス卿、エレクトラさん」

「……はい。おっしゃる通りだと思えます」

ただお願いしただけで推薦をもらえとは思っていない。

辺境伯閣下からの言葉だけで通るなら、こうしてお会いすることもなかったのだ。

「だから、二人には『お仕事』をお願いするわね？　それが条件。お仕事を果たしてくれたら、私から夫へ推薦をもらうようにお願いしてあげる。それでよろしい？」

ニコリ、と。リユースウェル公爵夫人は微笑んだ。

私とそう変わらない年齢だろうに、どこか迫力を感じさせるのだった。

リユースウェル公爵夫人からのお仕事。

まず、リシャール様はシンプルに騎士団の訓練への参加だった。リシャール様は辺境伯家騎士団の所属であり、交流訓練という体ね。

基礎訓練に参加した後、リシャール様の実力の確認に移るらしい。

まずは何より実力を示さないと、そもその条件を満たしているか分からないものね。

私の方は公爵夫人のお手伝いだった。公爵夫人のお仕事の手伝いって、していいのかな。

「あのう。知ってはいけないようなことを知ってしまいそうなのですが……」

「ええ？　そんなことないわよ。貴方、公爵夫人を何だと思ってるの？　普通に侍女ぐらい居るのよ？」

「それは公爵家側の人間だからと言いますか……」

「まあまあ。とにかくエレクトラさんはしばらく私付きになって相談相手になってちょうだい」

「相談相手ですか」

公爵夫人の相談相手？ 恐れ多過ぎる。

「女神様だもの、私の相手ぐらいねえ？ ふふ」

「そ、それは、ただの呼び名であって身分を示すものではなく。あと『戦場の』ですから！」

ここ、意外と大事である。私が他人より優れているらしい部分は治療魔法の力となるのだけ。

出来るのは外傷を治すことだけだ。治療魔法では病や毒は癒やせない。

呼び名が独り歩きすると私ならそういったことが出来るのでは？ と思われてしまう。

だから私は『戦場の』女神でしかないのだ。戦場で戦う騎士様たちの傷を癒やす。それに特化した能力。それにしたってこう、別に魔獣を浄化するとか結界を張るとか、そういった能力は付随していない。聖女だ女神だといった噂に付随しそうな能力を求められると困るのである。

「ふふ、とにかく。貴方はしばらく私の話し相手になるの。クラウディウス卿に上級騎士になって欲しいのでしょうか？」

「……はい。それは、よろしくお願い致します」

「ええ。貴方も、ずっとグランドラ領に居たのだから。今の王都や中央について知っておいた方がいいのではない？ 貴族夫人としての『勘』が鈍っているでしょう？」

「勘、ですか」

「そう。ずっと前線、ではないでしょうけれど。魔法で身体からだを張ることばかり増えて。交流や情報収集だけで様々なことを知り、今後の方策を練る頭の使い方をしていないでしょう？ だから勘を

取り戻しなさいね」

「……はい、ありがとうございます。リユースウェル夫人」

「カタリナと呼んでいいわよ、エレクトラさん」

「それは恐れ多い……いえ、カタリナ様。かしこまりました」

ということで私はカタリナ様のお付きになった。元々、私が居なくても公爵夫人の仕事はこなされていたはずだ。人手不足に陥った様子でもない。だから、私は『オマケ』で追加された人員に過ぎない。そう考えると気は楽だ。もちろん、仕事ならばサボるつもりもない。

しばらくは本場に侍女……ううん。『秘書見習い』みたいな状態だった。

基本的にカタリナ様の身の周りの世話はしていない。

私が関わるのはお仕事関係のみだ。だから、これは侍女の仕事ではないだろう。

最初は意見を求められるというより、現在の情報を頭に入れていった。

公爵夫人なので様々なお話が外からもたらされる状態だ。

「我が国の王太子殿下は以前、隣国の王女と婚約なさっていた。でも、それはあちらの事情で婚約解消されることになったのよ。それは聞いている？」

「はい、その噂は私たちも聞いております」

私はリシャール様から聞いたけれど、彼は騎士団で噂になっているのを耳にしたらしい。

辺境伯領にまでそんな噂が伝わってくるぐらいの大きな出来事だった。

「ユリアン殿下のお相手は隣国の第四王女だったのだけ……」

私たちの国、ランス王国の王太子殿下の名は、ユリアン・フォン・ランス殿下。

この国の第一王子である。ご年齢は私よりも少し下で、去年に二十歳はたちになられたばかりだ。

「隣国の王女様、どうやら『真実の愛』に目覚められたらしいわ」

「……ええと？ 真実の愛ですか？」

「早い話が不貞ね。あちらの貴族令息と恋仲になった、と」

「それはまた」

どこにでも不貞話は転がっているのね。

「あちらの有責ということで、いくつかランス王国に有利な条件で協定がまとめられたの」

「そうだったのですね」

「両国王家の間で話は既についたし、賠償も決まったのだけれど、その余波が大きかったわ」

まず、隣国の王女が嫁ぐ予定がなくなったことで、あちらとの関係が緊張状態になった。

少なくとも友好的な関係とは言えなくなったらしい。

それに伴って隣国と接する辺境伯領や近隣領地にも影響があった。グランドラ領とは別の場所ね。

隣国との貿易によって潤っていた部分に翳かげりが見え始めた。とても頭が痛い問題だ。

国や王家としての面めん子もあるが、正直そのまま隣国には友好的な相手で居てくれた方がありがた

かっただろう。迷惑な話である。

「王太子殿下の婚約者の席が空いたことで、いくつかの貴族家が動き始めている。また他国の王族・貴族から相手を見繕うか、国内から相手を探すか。王家の方針が決まった話はまだないわ」

それも当然の動きだろうなあ。年頃の娘の居る家門は特にそうだろう。

「『聖女』なんて噂の立っていた彼女は、もし結婚していなかったら殿下の婚約者候補に上がって

いた可能性があったわ。年齢も相応なもの」

「それはまた……」

リヴィア様。彼女も聖女と呼ばれているけど、その能力は私と同じ治癒魔法だろう。結果を張ったり、魔獣を浄化したり、なんて彼女が出来るとは聞いていない。

「呼び名だけでは王太子妃、ついては未来の王妃など務まらないと思います」

「……そうね。彼女には絶対に無理だった。彼女には、ね？」

うん？ 何か含みのある言い方。

「エレクトラさん？」

「は、はい。何でしょうか、カタリナ様」

「貴方、分かっている？ 『聖女』という呼び名で候補に上がるなら、『女神』な貴方は、もっと候補に近しくなると思うの。それに貴方は領地運営を担っていた実績もあるわ。彼女と違ってね」

「え、私ですか？」

「そう」

「流石にそれは……。だって、私。婚姻歴がある女です。王太子の伴侶にはなれませんか」

「『白い結婚』なのでしょう？ 前の旦那とは」

「それはそうですが……」

そうかもしれないけど。でも、それを信用出来るか否かの話だろう。少なくとも『疑い』がある時点で王族の伴侶など適格とは思えない。また領地運営などの能力に関しても、あくまで私が任されていたのは狭い男爵領だ。とてもこの件における評価に値するとは考えられないわ。

「派閥の関係もあるからねえ」

「派閥ですか」

「ええ。だって今までは隣国の王女が王太子妃になる予定だったでしょう？ 国内貴族はある意味で平等だった。もちろん実態は別として。それがどこかの派閥の令嬢が王太子妃になるなら大きく話が変わってくる。それを避けるためには……」

「避けるためには？」

「教会から名高い女性を招き、教会との関係を強化しつつ、国内貴族を刺激しない。そんな手もあるわよねえ」

「……いえいえ、私、実家を離れていますが、それでも子爵家の出なので！ それだと」

国内貴族の不公平感の払拭には役立たないだろう。ヴェント家を優遇するようなもの。

「子爵家、でしょう？」

「……はい、そうですね」

子爵家を優遇したところでどうにもならないかあ。もちろん影響がまったくないとは言えないけれど。伯爵家以上の高位貴族家に与える影響と比べればね。

「要するに貴方は、まったくの蚊帳の外ではないということよ。だからこそランス王国内の情報について私の下できちんと把握しておきなさいね、エレクトラさん」

「はい、カタリナ様。ありがとうございます」

そうは言っても、だ。流石に自分が若き王太子と関わるなんて。そんな風に私は思っていた。

だいたい私には……愛する……婚約者が居ますからね！ なんて！

私は公爵家が所有する、敷地内にある別邸で部屋を借りることになった。

リシャール様は騎士団員が入る宿舎に部屋を用意していただいた。

公爵夫人の下で過ごし始めて、まだ数日。リシャール様は馴染^{なじ}めているかしら？

「エレクトラさん、こちらが騎士団の訓練場よ」

「はい、カタリナ様」

公爵家保有の騎士団といっても、あくまで邸宅の警備と公爵夫妻の警護する者たちだけが王都に居る。多くの騎士たちは主に公爵領に居るはずだ。

ランス王国はグランドラ領の森ほどではなくとも森の奥に魔獣が湧く国だ。近隣の国でも同じ。そのため、各領主に相応の戦力、つまり騎士団を抱えることが許されている。

ただ、その規模は基本的に爵位相当となっている。

男爵家が抱え込める騎士は、せいぜい数人程度。公爵家では部隊を組み、いくつかの場所に派遣してもまだ余裕がある人数だ。

辺境伯家は特別な立場なので騎士を抱えられる数に制限はない。制限がないといっても騎士たちも人間なので、それなりに抱え込めば養うお金が掛かる。無茶は出来ないということね。

「活気がありますね」

「そう？ 辺境の騎士団を見てきた貴方でも、そう見える？」

「はい、やる気に満ちているように見えます」

私はこの訓練に参加しているであろうリシャール様を捜す。すぐに見つけることが出来たわ。

こう、オーラが違うのよ、オーラが。婚約者の欲目かしら？ ふふ。

真剣に訓練に打ち込むリシャル様を、私は心躍らせつつ、表面上はお淑やかに見つめた。やっぱ彼が一番逞しく力強いと思うわ。

私はカタリナ様と共にしばらく訓練の様子を眺めることになった。

カタリナ様の侍女が日傘を差してくれるのだけ……、ええと。いえ、私も子爵家の名を持つ身で、確かに貴族ではあるものの、最近はシスターとして活動していた。

色々な事情込みで公爵家の侍女にこのように丁重に扱われると恐縮してしまう。

「……そうね。クラウディウス卿の実力を見せていただけるかしら」

「実力、ですか」

「ええ、ローナンを呼んでちょうだい」

カタリナ様が侍女に言いつけると、ローナンと呼ばれた男性がやって来た。

訓練を統率していた方なので、おそらく彼は騎士団長なのだろう。その予想は当たっていた。

「エレクトラさん、彼はローナン・ファンブルグ卿。上級騎士であり、公爵家の騎士団長よ。ローナン、こちらは私の友人、エレクトラ・ヴェント子爵令嬢。クラウディウス卿の婚約者よ」

「ローナン・ファンブルグでございます、ヴェント嬢。騎士団長を務めております」

「エレクトラ・ヴェントでございます、ファンブルグ卿。お目に掛かれて光栄です」

挨拶を交わしつつ、カタリナ様が要望を伝える。

それでリシャル様の實力を知るための特別な模擬戦が始まることになった。

「ローナンの見立てでいいわよ。実力差があり過ぎては怪我をしてしまうから」

「……となると、私が出ることになりますが」

「あら」

公爵家の騎士団長を務めているほどの人が、リシャール様をそう評価した。

分かる人には分かるということだろう。どこかの家の騎士団長と違って。

いや、あちらもリシャール様の實力を認めてはいたのか。だからこそ、嫉妬でわざと怪我をさせた……かは詳しく分からないけど。

「では、ローナンとクラウディウス卿で一騎打ちの試合を。出来る限り、本氣の實力を見せて欲しいわ。もちろん、双方に怪我のないようにね」

二人の試合が準備されることになった。私は準備中のリシャール様に近寄り、声を掛ける。

彼は普段の剣ではなく、木剣を二本借りて戦うみたい。

「リシャール様、お怪我のないように」

「はい、ありがとう、エレンさん。ここで實力を示させていただきます」

「頑張って」

私が応援すると彼は笑って請け負ってくれた。魔獣との戦いに赴くよりも、ずっと安心して見ていられるわ。

そして試合が始まった。先に仕掛けたのはファンブルグ卿。木剣を振り被り、リシャール様に打ち込む。リシャール様はその攻撃を真正面から受け止めるのではなく受け流した。

彼は二本の剣を使って戦うスタイルだ。両手持ち相手に力勝負はせず、攻撃は躲す^{かわ}かないなして、自身の攻撃に移る。二刀流による連撃へと繋^{つな}げていく。

……その姿はダンスを踊っているよう。力強さと華麗さ、流麗さを備えた剣舞。相手は変則的な攻撃に翻弄されてしまう。その戦い方は魔獣相手より同じ人間相手の方が有効かもしれないわね。ああいう戦い方をする騎士は少ないから。騎士様たちは軽々と振り回しているけど、剣一本だつてとても重いもの。それを二刀流だなんて、かなりの筋力が必要だと思うわ。リシャール様は、それを難なくやつてのける。体格も逞しいけど、でも他の騎士様とそこまで大きく変わらないの。あの身体のどこにそんなパワーが……いえ、逞しいのは逞しいのだけ。

魔法によって身体の強化が出来ることは私が証明してしまっている。「魔力」は治療士だけが保有するものではない。この国に、絵本に出てくるような攻撃的な魔法を使える者は居ないけど。

よく考えたら魔力による身体強化なんて、騎士様たちは無意識にやっているのでは？
リシャール様もそちらが優れているのかもしれないわ。

試合はリシャール様が優勢だった。辺境伯家の騎士団でもそうだったけれど。

リシャール様、もしや王国一の騎士なのでは？ 私たちの噂、如何にも私が中心かのようにだけけれど。リシャール様だけでも『聖騎士』の名に恥じない猛者なのでは？ 私の婚約者、強過ぎ？

「はああああッ！」

ガイン！ と裂帛の気合と共に振り抜かれた木剣がファンブルグ卿の木剣を弾き飛ばした。

リシャール様の勝利よ。私は、内心で大いに喜びながらも、カタリナ様や公爵家の騎士団たちの手前、大人しく拍手を送るだけに留めた。ただ、騎士団の皆さんの表情を見るに彼らの団長が負けたことを憎く思っている様子はない。

素直に『凄い』と驚き、称賛する雰囲気があった。辺境伯家もそうだったけど、こちらの騎士団

も良い空気ね。

「お見事。……申し分ない実力だ、クラウディウス卿」

「ありがとうございます。ファンブルグ团长」

試合が終わって固く握手する二人。清々すがすがしい試合だったと言えるでしょう。

木剣を他の騎士に預けてから、二人は私たちの下へやって来た。

「彼の実力については申し分ありません、奥様」

「そのようね。人柄についてはグランドラ辺境伯が保証しているし」

リシャル様が高評価を受けていることに頬がにやけそうになるけれど我慢する。

でも、彼とチラチラ、視線を交わし合って意思疎通を図った。

『いけるかも?』『いやいや、まだまだ』なんてね。

「グランドラ領で戦っていたなら魔獣との戦いの実績もあるようなもの。あちらが推薦するという

のであれば、正直これ以上、彼を試すこともないかと」

「ええ、分かっているわ。元々そのつもりで預かっているのだから」

おいそれと伯爵相当の爵位を与えることは出来ない。

慎重になるのが当たり前だけど、カタリナ様やファンブルグ卿はかなり好意的ね。

「……でも」

でも? と続けられたカタリナ様の言葉に私たちは耳を傾ける。

「インバクトが足りないのよねえ」

「……はい?」

なんですか？

「そりゃあ実力・人格、申し分なくて後ろ盾を得たなら上級騎士にはなれるわよ？ でもねえ。『聖騎士』なんて呼ばれている人だもの。やっぱり、そこはねえ。何か大きなことをしてもらった方が『箔』^{はく}がつくのではない？ このまま上級騎士にすると『あ、そうなのね、ふーん』で社交界でのお話も終わってしまいそうなもの。もっと、いい話題性はないかしらねえ？」

カタリナ様のお考えになっていることは私たちの想定のとおりだった。

私とリシャール様は一旦、二人でお話しすることになった。

少し話した後でカタリナ様が集められた人たちと今後について話し合う予定だ。

「インバクトって……なんででしょう？」

「困りましたね」

中々衝撃的なカタリナ様の発言。ただでは上級騎士爵を取れないということね。

「話題性、つてことですよね」

「功績の話ではなく？」

「うーん、話題性のある功績が欲しい、ということではないでしょうか？」

リシャール様の実力は申し分ないことが分かった。

実力だけなら充分。人間的な評価も上々のようだ。

普通ならば長期間、騎士団に所属して信用を勝ち取り、実績を積み上げる。

その騎士団を抱える領主が動いて上級騎士爵を賜るのだ。

私たちはそれを一足飛びに叶かなえようとしている。

つまり、名声を盾にしてコネを使い、成り上がろうとしている。

確かにグランドラ辺境伯からは惜しみなく応援されているけれど。

真つ当な手段かといえば、あまり真つ当とは言えないやり方だろう。

「焦り過ぎだったかしら……。もっと地道にすべきだった？」

「いえ、リユースウェル夫人はあくまで前向きに考えてくださったので、上級騎士になりたいと願うことは否定されていないと思います」

「それは確かにそうですね」

単に今、私たちに足りないものがそうだという指摘だ。

私たちは辺境での活動によって名声を得た。ちよつと『宣伝』ありきだったけれど実績も伴っている。だからこそ、グランドラ辺境伯閣下は私たちをリユースウェル公爵家に紹介してくださったのだ。単に上級騎士になるだけならば辺境伯閣下の推薦があればなれなくはなかった。不確定だけれど。

そこを確実にするため、かつ公爵家の後ろ盾も欲しいと願ったため、今こうした壁にぶつかっている。では、今更にリユースウェル家の推薦は要りませんが、辺境伯閣下の推薦だけで充分です、と言えるか？ 言えるワケがない。

踏み出してしまった以上はもう戻れない。

なので私たちはカタリナ様のお考えを乗り越えていくしかないのである。

二人で話し合つて落ち着いたところで改めて今後に向けた『会議』が開かれることになった。場所は公爵家の邸宅の一室だ。

「じゃあ、これからのことについて話し合ひましょうか」

「はい、カタリナ様」

「お手数を掛けて申し訳ございません、ありがとうございます、リユースウェル公爵夫人」
部屋に居るのは私、リシャル様、カタリナ様。

リユースウェル家の騎士団長、ローナン・ファンブルグ卿。

カタリナ様の専属侍女、ニーナ・マクライン様。こちらは若い女性よ。

カタリナ様がそもそもお若いからね。その侍女もそう年齢は変わらないように見える。

それともう一人は騎士様？ 若い男性騎士が同席していた。

私の視線に気付いたのか、ファンブルグ卿が若い騎士を紹介してくれる。

「ヴェント嬢、こいつはポール・ベルシュタイン。団員の中でも若い騎士、見習い上がりです。頭の固い自分よりも今回の件では役に立つかと思ひ、同席させています」

「はじめまして、ヴェント様。ポール・ベルシュタインです」

「なるほど、そうなのです。はじめまして、ベルシュタイン卿。本日はよろしくお願ひします」
公爵夫人の居る場に同席が許可されるとは、かなり厚遇されていると思う。

期待の新人さんなのだろうか？ 年齢は私よりリシャル様よりも若そうに見える。

「まず、クラウディウス卿。貴方の上級騎士爵への推薦については前向きに考えています」

「……ありがとうございます」

「だけど、このままだ推薦したのでは面白くないわ」

面白味……。そういう問題なのか。

「貴方たちの目的の一つとして、ファーマソン公爵家や『英雄さん』たちからの干渉を撥ねのける立場になりたいのよね？　それが目的なら、ただ上級騎士になるだけでは足りないわ。二つ名での名声も、実情はともかく実績はあちらより弱いと思いなさい。英雄さんは国の危機で大活躍したのですから」

『英雄』は元夫であるハリード様が呼ばれている二つ名だ。

グランドラ領に溢れた魔獣の群れがああ領地を突破していたら国の危機だった。

そんな戦場で活躍した『英雄』ハリード・カールソンが相手では、後から現れた『聖騎士』は少し弱い。それはきつと実力的な問題ではないのだろう。

「一言で言ってしまうえば、今のクラウディウス卿には『華がない』の。聖騎士の肩書きは魅力的に思うのだけどね」

「華……」

あつ、リシャール様がほんのりシヨックを受けている。可愛い。

「見た目を着飾っても活躍の場がなければねえ」

そんな言葉を悪気なく？　続けるカタリナ様。

リシャール様の肩をポンと慰めるように叩くファンブルグ卿。

「……ええと、発言をしてもよろしいでしょうか？　奥様」

「もちろんよ、ポール。他の皆も遠慮なく話してね。この場は皆で知恵を振り絞りましょう、とい

う場なのだから」

「ありがとうございます。今、ご指摘されたことですが、クラウデウス卿だけの問題ではないように思います」

「あら？」

リシャール様だけの問題ではない？

「もちろん、魔獣が相手で戦いとなれば騎士は剣を振ります。ですが、平穏な時における騎士はひたすらに鍛錬と魔獣駆除の日々。華々しさがありません。いえ、それに大きな不満があるワケではないのです。何事も平穏が大事ですが、ただ……」

「ただ？」

「何か大きな、それこそ『華のある』見せ場があればなあ、と思います。それこそ普段からしている模擬戦、試合を催し物のようにもっと派手にするとか。騎士団以外の人々に自分たちの腕を披露する場があれば……やる気がよくなるかと」

騎士団は日頃から訓練をしている。それだけでなく、治安維持も担っているため、街中や領地内の見回りもしている。彼らの出番は有事の際だけではない。とはいえ、なのだろう。

もっと平和な中での張り合いのある『行事』があればいい、と。

昔から、そういった場もあるにはある。演舞というか、馬上試合をして見せることがある。

そういうものはその騎士が仕える領主一家に見せるためのものが多い。あとは王族相手か。ベルシュタイン卿が言いたいのはそういうものとは少しニュアンスが違うようね。

もっと『お祭り』に近い、市井しびの民寄りの行事だろうか。

「剣術の試合、大会のようなものを開催すると。それを騎士団外の人たちも楽しめるように？」

「はい、そんな感じで……」

興行の一つとして考える。

「ただ、騎士たちへ注目を集めるだけなら訓練場を見学可能にすることになりますね」

「それだけではまだ足りないわね。でも、そういうの、やりたい、やって欲しいの？」

「ええと、あの。そういうことがあればなあ、と。当然にする魔獣との戦い、防衛、警備、戦準備などとは違う、なんとというか」

「お祭り？」

私はそう補足する。

「そう！　そういう騎士のお祭りのことです。それこそクラウデウス卿の実力の見せ場になると思います。我々だけが知っているのは勿体ないぐらいの騎士ですからね、クラウデウス卿は。」

もっと多くの人に知ってもらってもいいのではないのでしょうか」

短い間だというのにリシャル様は随分と評価されているのね。

私の婚約者様、流石である。ふふ。

「それだとリュースウェル家の騎士団内だけでやってもいまいちよねえ」

「そうですね。それをやる場合は他家の騎士団を巻き込むのが望ましいかと」

私はカタリナ様と目を合わせる。もし、この方針で進むなら？

カタリナ様は、ニコリと笑顔を浮かべられた。あ、やる気だ、この人。

「その話で進めてみる？　エレクトラさん」

ここでリシャルド様ではなく私に意見を聞く。それは、つまり企画立案、情報収集・分析、実行、運営まで……尽力しろと。そういうことかな……？ とつても大変そうだと。

たぶん、名義を貸してくださるし、資金面の支援もしてくれそうだけども。

あと人手も貸してくださるかしら。情報収集の面は心配なさそう。

公爵夫人を後援にした行事の開催、かあ。

あ、ベルシユタイン卿だけでなく、ファンブルグ卿も少し目を輝かせている！

足りなかったのね、実力を示す機会が。騎士団長だもの、彼も実力者なのだ。

「エレクトラさん」

「はい、カタリナ様」

「もし、その行事を開催するなら。当然、呼ぶわよ」

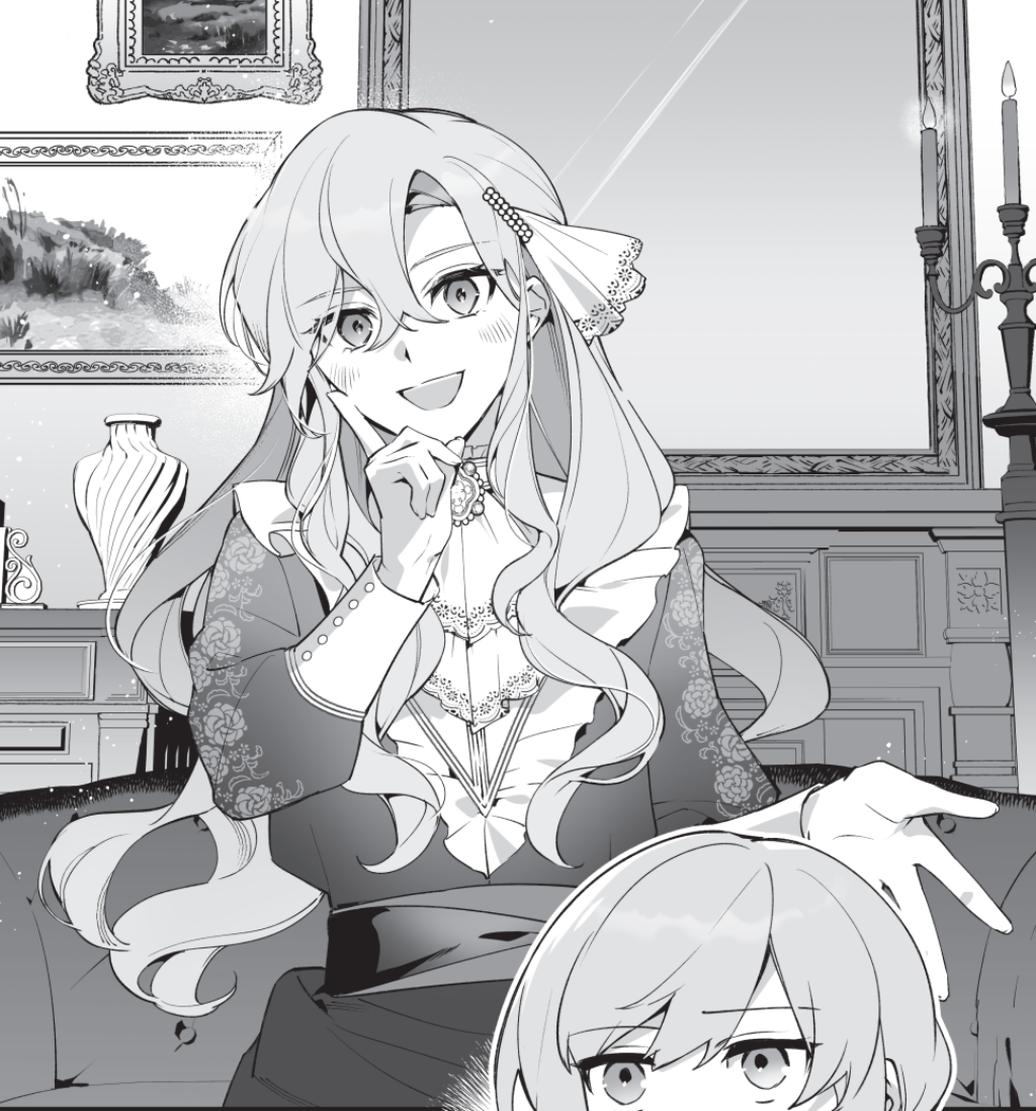
呼ぶ？ 誰を？ それは、もちろん。

「『聖騎士』と『英雄』の対決。それは皆が観たがるはずよ。それにファーマソン家の騎士団長にも参加してもらわないとね？」

「……ソウデスネー」

こうして私たちは騎士たちの実力を示す『お祭り』を開催するために動き始めることになったのだ。

カタリナ様の『匠』に負けたともいえる。……これから、とても大変なことになりそう。





ハリードがエレクトラと離縁して一年後、リヴィアと結婚した。

だが、そこからの彼らの人生は転げ落ちるようなものだった。

借金を背負い、使用人たちの多くが居なくなり、苦しい状況に立たされる。

それだけでなく結婚式で暴露されたハリードの嘘でリヴィアとの関係が悪くなった。

とても幸福なスタートとは言えない。また、リヴィアの出生に関する話も聞かされてしまった。

リヴィアは現ファーマソン公爵であるジャック・ファーマソンと平民の女性の間に出来た子。

ただし、公爵位は正式には夫人の方にある。そのため、リヴィアにファーマソン家の血は流れて

いない。それにファーマソン家には嫡男が居る。

父親であるジャックは侯爵家出身だが、どの道、彼女は邪魔者でしかない。

借金苦に追い込まれ、夫婦関係にも亀裂が入った理由はリヴィアの存在。

だが、彼女を手放すことは許されない。そのようにファーマソン公爵夫人に警告されている。

公爵家に目を付けられれば子爵家に成り上がったばかりのカールソン家など一溜まりひととまりもない。

そのことは既にさんざんに突きつけられている。

ハリードは、ファーマソン公爵夫人の意向に逆らうことなど出来ない。

不幸中の幸いは、ファーマソン公爵夫人の『報復』の対象が、決してリヴィア本人ではないこと

だろう。もしリヴィアが標的だったなら、とつくの昔に彼女の人生は終わっていたはずだ。

これは今まで陰ながら不貞相手の娘を支援していたファーマソン公爵ジャックへの『見せしめ』だった。ハリードは、リヴィアを閉じ込めるための『檻』に過ぎない。

だから、きつと。彼らの価値観における『苦勞』を背負ったとしても。

自分たちにとつての『幸福』を許されていないワケではない。

慎ましやかに、謙虚に生きていくことは許されている。

『この程度なら』と、容認されたのだろう。公爵家でもなく、侯爵家でもなく、ただの子爵家。充分だろう、と。ただ、このカールソン家で苦勞して暮らしていくことを課せられた。

華々しい貴族の生活などはリヴィアにさせてやれそうにない。それでも。

自分たちが出会ったのは戦場であり、リヴィアは戦場を駆けずり回って騎士たちを癒やす、治療士だった。彼女は今の生活にだって、いづれ慣れていくはずだ。

「リヴィア」

ハリードは屋敷に居る彼女に声を掛ける。

偽エレクトラという話し相手が居なくなり、かといって侍女に何かを語って聞かせるでもない。

カールソン家の使用人は一気に数が少なくなっており、その暇もないのだが。

それでも屋敷に残った者たちが居る。長年、カールソン家に仕えてくれた侍従長や侍女長は去らなかつた。まだ、ハリードたちは完全に終わったワケではないのだ。

「……………」

結婚式の日から、彼女との間にある確執をどうにかなくそうと尽力してきた。

しかし時間が経つにつれ、どんどん無口になっていくリヴィア。

「……なあ、リヴィア。嘘を吐いていたことは悪かった」

部屋に二人きりになっても色めいたことにはならない。

元々、交際し、婚約していた間でも身体の関係を持ったことはなかった。

出会ったのが戦場であり、当然のことだった。

婚約中もまた、肌を重ねないのは常識と言えば常識だ。

結婚式の後、屋敷に帰ってからは二人の空気や屋敷の環境が最悪でそれどころではなかった。

だが今、ハリードとリヴィアは夫婦になったのだ。

そういう関係に至っても何もおかしくはない。……ただ。

「リヴィア」

ハリードが彼女の頬に手を添えようとする。

身体の関係はないが、口付けだけならば既にしたことがあるのだ。

だが、ハリードの動きを見て、ビクリと震えるリヴィア。その姿を見てハリードは手を止めた。

拒絶されたと思い、怒る。そのように以前なら振る舞ったかもしれない。

だが、今の彼はそんな気力も失なくしていた。

経済状況と屋敷内の生活環境が悪化して疲れ切っている。

また将来の不安が強く、長く続くであろう苦難の日々の予感がより心を疲弊させていた。

だからこそ冷静になって彼女の様子を見られたのかもしれない。

「……なあ、リヴィア？」

「……何？」

天真爛漫。元気で健気で女神のようであつた彼女。その姿に、振る舞いに惚れ込んだはずだつた。

だが、こうしてみれば何か違うものが見えてくる。

「君のことを、聞かせてくれないか」

「……私のこと？」

「ああ。思えば素敵だと言ひ合うばかりで、俺たちは互いのことを知らなかつただろう」

「……私のことなんて。何も話すことないわ」

そうなのだろうか？ そんなことはあるのだろうか。では、彼女に対する違和感は何だろうか。

リヴィアは魅力的な女性だ。見た目も良く、少々細身だが、そこに不満はない。

ただ、彼女の仕草に感じたのは拒絶というよりも、怯え？ ハリードはそう感じた。

「これは今すぐにとつて話ではないので、君の気持ちや考えを聞かせて欲しいだけなのだ……」

「……………」

「……聞について、どう考えている？」

「ねや？」

リヴィアは首を傾げる。可愛らしいものだとしてもハリードは思う。

「夫婦の、子供を作るための行為について、だ。俺たちは結婚したのだから。避けては通れない話だが……どの道、初夜はとうに過ぎてゐる。ならば今すぐに無理にする必要はないだろう。だが、子供を作ることに關しては妻である君の考えも大切だ。君はどういう風に考えているのか。それを知っておきたいんだ」

ハリード自身、彼女に何を問いたかつたのか。具体的にそれがあつたワケではない。

ただ、疲れた状態で見たりヴィアの仕草に対して、何かを感じ取ってしまっただけ。

「……子供は欲しいわ」

「本当に？」

「……ええ」

それは『意外』である。ハリードは思った。なんとなく、リヴィアは子を望んでいないように感じていたのだ。だが、彼女は今、はっきりと子供が欲しいと言った。

それだけで自分たちの関係もまだ終わってはいないと、そんな予感がする。

「でも、『怖い』のは嫌」

「……こわい？」

ハリードは首を傾げた。

「子供を作るのに怖いことをするって」

「……ああ」

そこで、その言葉で。ハリードはリヴィアへの違和感の正体が分かった。

彼女は、リヴィアは……『子供』だ。見た目は成人女性のそれだった。

実年齢だって、おそらく見た目通りなのだろう。

だが、何か致命的に……彼女は、どこかで成長を止めてしまっている。精神の成長を、だ。

何度か侍従長や侍女長にリヴィアについての見解を聞いたことがある。彼女は悪女の性質だと。

エレクトラを執拗に捜させたのは元妻である彼女に勝ち誇りたいから。

女性としての部分が強く、そう出ているのだ、と。

口では否定しつつも、心のどこかでそうではないかとハリードも思うようになっていた。

だが、どうにも拭えなかった違和感。それならば、と。

だったら、こうなっている現状、先のないハリードのことなんて彼女は見捨てて逃げるはずではないだろうか。だが、リヴィアはそうしなかった。借金を背負い、贅沢な貴族の暮らしなど遠のいたはずなのに。……違うのだと思った。

表面上、見えている女性としての魅力。どこか浮世離れた価値観、態度、そのギャップ。

それが魅力的に見えていた。確かに異性を惹きつけるほどのものがあつた。

おそらく生みの母親譲りの魅力なのだろう。

彼女の母親であれば或いは見た目通り、言動通りの女性だったのかもしれない。

だが、リヴィアはそうではなかった。彼女はまだ庇護が必要な子供の精神の持ち主なのだ。

「君は……どうして、あんなにエレクトラに拘っていたのだ？」

その行為は女性として勝ち誇るためのものだと思っていた。

だが、もしかして、そうではなかったのかもしれない。

「……不安だったんだもの」

「不安？」

「ハリード様と、いつか結婚して、一緒になって。それでどうなるのかって。エレクトラ様なら、色々知っていると思ったの。ハリード様のことだって。一緒になって大丈夫な人なのか、とか。それに」

「……それに？」

「あの人、エレクトラ様じゃなかった……人。優しくなかったから。褒めてくれるのよ。嬉しかった。結婚式もお祝いして欲しかったの。なのに……居なくなって、私、何も分からない」

ハリードはリヴィアの言葉を聞いて頭を抱えてしまった。

「君は、彼女に……」

『母親』であることを願っていたのか。こともあろうに、離縁した元妻に。

それも、己が原因で離縁することになったエレクトラに。

「今まで何でも上手うまくいつてきたの。何でもよ。私が願えば何でも叶ったの。欲しいお菓子やぬいぐるみも人形も手に入った。それなりに満たされていたわ。でも、何もかも上手うまくいくのに……『家族』は誰もくれなかった。ハリード様と結婚して、エレクトラ様も優しく、幸せだと思っていたの。でも、なのに『彼女』は別人で、居なくなつて」

「……ああ、リヴィア。なんてことだ……」

彼女の望みは、願いは、最も欲しかったはずの『家族』は……父親は、彼女を捨てた。

公爵夫人が迫つたという離縁とリヴィアを天秤てんびんに掛けて。

……唯一の肉親であるはずの男は、リヴィアではなく、今の身分を取つたのだ。

違和感があった。公爵夫人の、絶大な権力を持って為なされたはずの報復。

それが今のように真綿で首を絞めるような、ただの貧しい暮らし。

もつと苛烈であつても良かったはずだろう。

確かに対象はリヴィアではなく、公爵だったのかもしれない。

だが、それにしたつて愛人の娘なのだ。温情を掛けてやる必要はなかつたはず。

……『ぬるい』と。公爵夫人の制裁にしては、きつと。分かっていたのかもしれない。

リヴィアがどういう人物か。罪と、その理由も、すべて分かっている。

だからこそ『手を差し伸べない』だけで罰となりうるのだ、と。

公爵は娘の本当の望みを叶えたことはなかった。財力に任せ、物欲さえ満たしてやればいい、と。

彼がしたことはどこまでも自己満足に過ぎなかった。

リヴィアは彼の浮気相手であった女性ではない。

どんなに高価な貢物をしたって、それ以前に満たされるべきものが満たされていなかった。

公爵ジャックは、すべての判断を間違えた。

娘を、子供を、愛人と同じような『愛し方』でいいと考えた。間違いだ。何もかも間違い……。

「リヴィア。俺が、君の……『家族』だよ」

ハリードはリヴィアの手を握った。今度は拒絶されることも怯えられることもなかった。

彼女に必要なのは異性としての触れ合いではない。

今、目の前の女性が、本当に望むものを与えてあげられるのは自分だけだ。

ハリードの言葉に小さく頷いて、リヴィアは涙を流す。

彼女も結婚式の日から今日まで疲れ切っていたのだと、ようやく分かった。

ハリードとリヴィアの『新しい人生』はこれから始まるのだ。